通し番号	４６４７

分類番号	23-94-34-02

相模湾における養殖イワガキの成長

［要約］ 相模湾において、イワガキ養殖の可能性を検討するために、イワガキ人工種苗を用いて養殖試験を実施し、養殖方式の検討を行い、併せて成長等の基礎知見を得た。イワガキ養殖を実施する方式としては、ロープ垂下方式で垂下水深 10m により養殖を開始し、殻高が 10cm 程度に成長した時点で籠垂下方式に移行し、垂下水深 1m で養殖を継続することで、高い成長が見込まれると考えられる。しかし、籠垂下方式へ移行する時期や籠の構造については、より詳細な検討が必要である。

神奈川県水産技術センター・相模湾試験場　　連絡先　0465-23-8531

［背景・ねらい］

近年イワガキの需要は関東地方を中心に拡大しており、相模湾におけるイワガキ養殖は、有望であると考えられる。そこで、相模湾においてイワガキ養殖の可能性を検討するために、養殖方式の検討と成長等の基礎知見を得ることを目的に養殖試験を実施した

［成果の内容・特徴］

1　ロープ垂下方式によるイワガキの殻高の成長は、垂下水深の違いによって、有意な差は認められなかった（図１）。

2　ロープ垂下方式では、垂下水深が深くなるほど、イワガキ軟体部の成長が小さくなることが認められた（図２）。

3　ロープ垂下方式では、全重量が重ければ、軟体部重量も重いという正の相関関係が認められた（図３）。

4　籠垂下方式へ移行後、１ｍ垂下区で軟体部重量が大きく増加した（表１）。

［成果の活用面・留意点］

1　波浪の強い外洋に面した相模湾では、ロープ垂下方式から籠垂下方式への移行は、軟体部重量の増加を促すだけでなく、ロープ垂下方式でのイワガキの辺縁部とロープの擦れによるロープの破断を防ぐ点でも有効な手段であると考えられる。

2　ロープ垂下方式から籠垂下方式へ移行する時期、籠への収容個数による成長の把握、籠内での転がり等を防ぐ構造の検討なども含め、養殖手法の詳細な検討が必要である。

3　養殖イワガキを商品として販売を検討する際には、養殖期間は2年、出荷目標サイズを300gとすることで、市場も受け入れやすくなると考えられる。

［具体的データ］

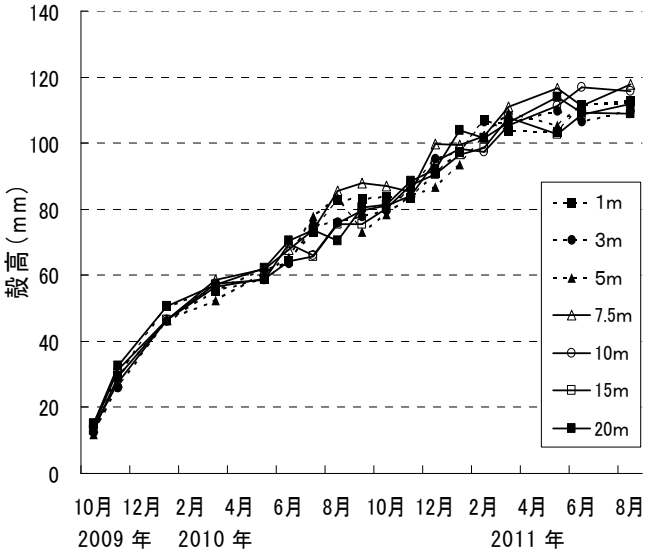

図１　ロープ垂下方式による垂下水深区ごとの殻高の推移

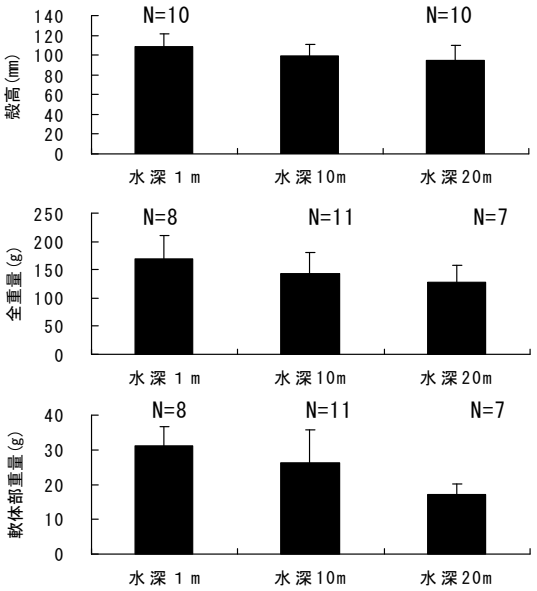

図２　ロープ垂下方式による養殖開始450 日後(2011/1/7)の垂下水深区ごとの殻高、全重量及び軟体部重量（注　エラーバーは標準偏差）

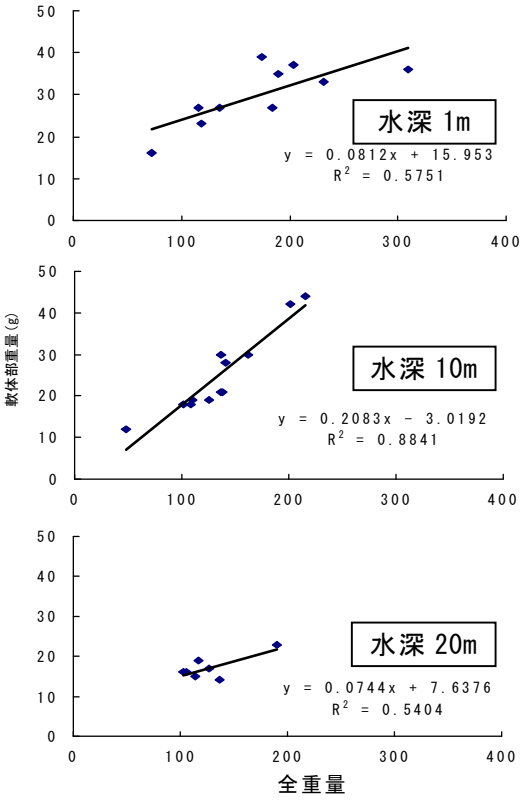

図３　ロープ垂下方式による養殖開始450日後（2011/1/7）の垂下水深区ごとの全重量と軟体部重量の関係

表１　籠垂下方式の開始及び終了時の垂下区ごとの殻高、全重量及び軟体部重量

	測定日	垂下水深(m)	殻高(mm)	全重量(g)	軟体部重量(g)
開始時	2011年10月11日	1	113.6±10.2	288.6±54.4	46.2±16.2
		5	123.6±13.4	285.4±60.7	57.5±14.5
	2011年9月26日	20	116.4±9.9	186.6±32.3	36.1±7.0
終了時	2012年8月28日	1	131.7±12.6	409.5±65.4	104.1±18.5
		5	139.9±14.8	409.0±44.0	92.4±14.7
		20	122.0±12.0	236.6±57.9	43.2±6.7

［資 料 名］　神奈川県水産技術センター研究報告第6号（2013年3月）
［研究課題名］　相模湾における養殖イワガキの成長
［研 究 期 間］　平成21年～23年度
［研究者担当名］　渡邉芳明・石黒雄一・中川研